

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

繰り返される悲劇



全滅したアサリ (長崎県諫早市小長井町・8月5日)

方メートルでは、貝が開くなど約9割が死滅。同漁協によると、国営諫早湾干拓事業・潮受け堤防排水門から遠ざかるにつれ、被害の割合は低いという。(略) 県総合水産試験場によると、アサリの大量死の原因のひとつとして、大雨により海水の塩分が低い状態が長く続いたことも考えられるという。諫早湾では、7月下旬から、毒性の強いプランクトン「シヤトネラ」による赤潮の発生が拡大している。

研究者らは、潮受堤防締め切り後みられる貧酸素水塊により下層に酸素が供給されにくくなったことが原因とみている。諫早湾では一昨年夏にも湾北部のアサリが広範囲に死滅する被害が出ている。

養殖アサリ全滅

諫早湾で養殖アサリ大量死、7月下旬から赤潮拡大【読売新聞・8月6日】

有明海沿岸で赤潮発生に伴う漁業被害が相次ぐなか、諫早市沿岸のアサリ養殖場で、アサリが大量死していることが5日、わかった。同市の小長井町漁協などが調査した。同漁協理事の松永秀則さん(55)の養殖場約50000平



茫然となる松永氏

自殺止まらず 有明海漁民

開門アセス表明後も

7月には3名自殺

1999年1月、柳川市で働き盛りの漁民が首を吊って自殺し、同じ月、同じ漁協に属する漁師が焼身自殺で命を絶った。2カ月後、同じく柳川市の漁師が首を吊って命を絶った。「あと何人死ねば水門が開けてくれるのですか。」漁民たちが佐賀地裁に開門を求めてからもう7年が経過した。この間、マスコミに明らかになっていくだけで20数名の漁民が自ら命を絶ち、人知れず命を絶った漁民を含むとその数は何倍に膨らむか知れない。昨年6月、佐賀地裁は、国に開門を命じる判決を下し圧倒的世論に喝采をもつて受け入れられた。しかし、国は「アセス」という「まやかし」で国民の目を誤魔化そうとした。漁民たちは、不漁が一時的で、いずれ海が良くなると思えば歯を食いしばって我慢する。しかし、開門アセス発表後も、漁民の自殺が後を絶たない。海が良くなる兆しが見えない、つまり「アセス」が漁民にとって希望の光を絶つ「まやかし」にすぎないことを意味している。

今年7月、長崎県の有明町(島原

市)の漁船漁師(50代)、福岡県柳川市の海苔漁師(30代)、佐賀県大浦(太良町)のアサリ漁師(50代)が相次いで自殺した。この内2名は諫早湾干拓工事阻止行動に参加していた漁師だった。

諫早干拓堤防で首吊る

漁船漁師(佐賀)

佐賀県大浦の漁師大鋸幸弘は、「国がそのまま(控訴せずに佐賀地裁の開門命令に)従っていけば、今ごろ港は活気を取り戻し、その人たちも死なずに済んだと思います。国が漁民の切実な願いを無視して控訴したことから、有明海にも漁業にも全く展望が見えず、自殺を選ぶしか途がなかったのだと思います。私も、あとどれだけ我慢できるのか全く自信がもてません。漁民の自殺の知らせを聞く度に明日は我が身かと背筋が寒くなる思いです。でも、私が首をくくる時は、諫早の堤防でくくりまわす。そうすれば、大々的に新聞に載って、諫早干拓事業の抱える大きな矛盾が、全国民に知れ渡ることになるでしょう。私は、有明海を守るためには命をかけて抗議する。」と長崎地裁の法廷で怒りをあらわにした。